

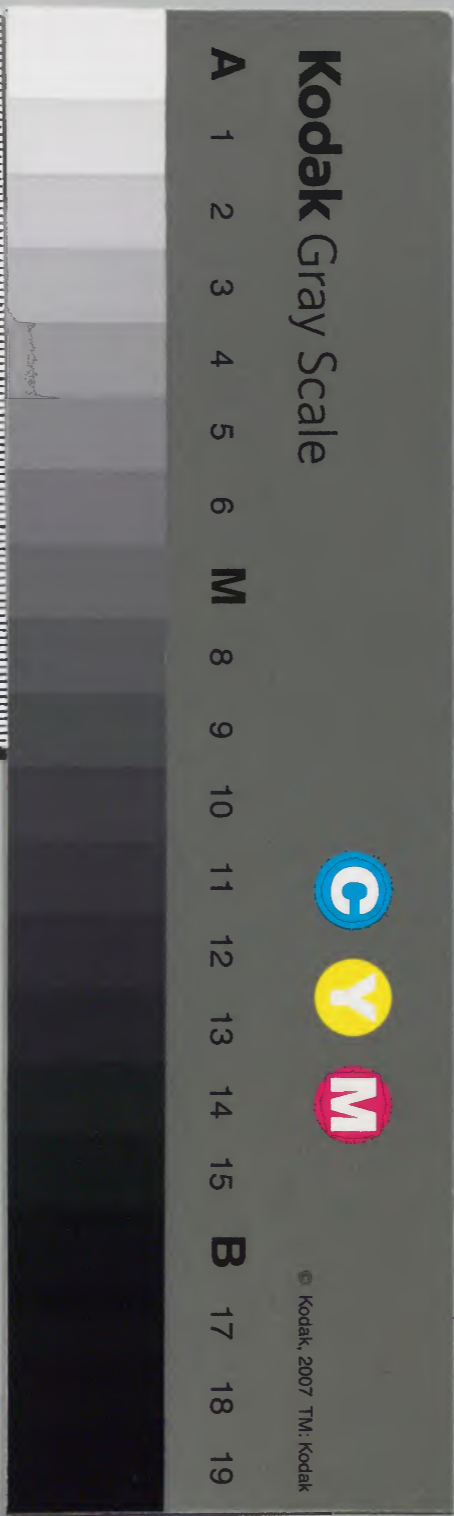
水虎考略

後編

和書門			
二八〇三九	函	架	冊
一八六	函	架	冊
一二	函	架	冊
四	冊		

内閣文庫			
二八〇三九	冊	架	函
四	冊	架	函
五	架		
九七	函		
和書			

内閣文庫	
番號	和 28039
冊數	4 ( 2 )
函號	197-119



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

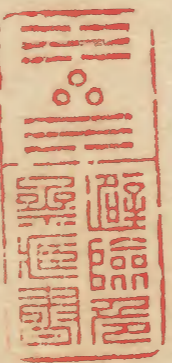


水虎考略後編目次  
卷之上

水虎腕圖一  
水虎腕圖二  
水虎圖一  
水虎圖二  
水虎圖三  
水虎圖四  
水虎圖五  
水虎圖六



對撫字立  
款原乙彦  
歲于作書  
二酉精舍



明治十四年購求

水虎圖七

水虎圖八

山海名物圖會 附圖

虛實雜談集 附圖

石見水記 有圖

水虎天靈蓋圖

日本史

下學集

倭漢三才圖會

見聞集

本朝食鑑

本草啓蒙

有斐齋劄記

狂齋雜著

玉滴隱見

和本草

市井雜談集

耳囊

武家高名記

志士清談

本朝俗諺志

諸國便覽

温泉談 二條

尚月庵滂錄

中陵滂錄 三條

卷之下

土俗談

新古隱顯聞書抄

硯北滂抄

怪談笈日記

裏見寒話

大和本草

諸國里人談

梅村載筆

中村秀鶴隨筆

博多細見

噶、夜話

一本談海

西播怪談實記 二條

諸州奇談 二條

詞淵

落粟物語

太平御覽

三才藻異

通雅 附考

談怪 阿萬擴 二條

日州水虎新話 六條

中島某四怪之一 四條

水虎骨末由記

水虎新聞雜記 三十條

水唐錄話 九條

水虎近事 二條

水虎腕圖一



三編

本村軍在處

此の事は六月の事にて城に在りて中  
橋より村に在りて軍在りて中事有りと  
行りて之を得流河より在りて河に  
去りて流河に在りて中事有りと  
此の事は六月の事にて城に在りて中  
橋より村に在りて軍在りて中事有りと  
行りて之を得流河より在りて河に  
去りて流河に在りて中事有りと  
此の事は六月の事にて城に在りて中  
橋より村に在りて軍在りて中事有りと  
行りて之を得流河より在りて河に  
去りて流河に在りて中事有りと

右の事は六月の事にて城に在りて中  
橋より村に在りて軍在りて中事有りと  
行りて之を得流河より在りて河に  
去りて流河に在りて中事有りと

三編 古川 七文也

水虎腕歌贈古川生

紫海古生才罕儔  
蒼孺千里事宦遊  
永夜盜簪語神  
怪談遍鄧衍  
九州生也徐  
探懷袖一片  
斷腕向  
座投長爪  
瓏璣欺瑤織  
毛慘黑類  
獼猴掌上妖  
氣凝未散  
猶想攫裂  
餓虎伴  
滿堂瞥見  
咸駭避  
沫髮縮  
領瞳雙眸  
生道綠由  
請詳敘  
四座莫喧  
聽我語  
吾鄉  
壯士寸木  
子梟闕如  
熊百夫禦  
擊刺如  
堪摧敵  
鋒奚  
旁投石及  
超距維時  
文化丙子  
年夏夜獨  
行傍長川  
回堤蛇折  
草簇咫尺  
不辨步難  
前忽有一  
童潛尾  
後歸途里  
許猶隨肩  
腥穢龍人  
不可當  
水風四至  
氣

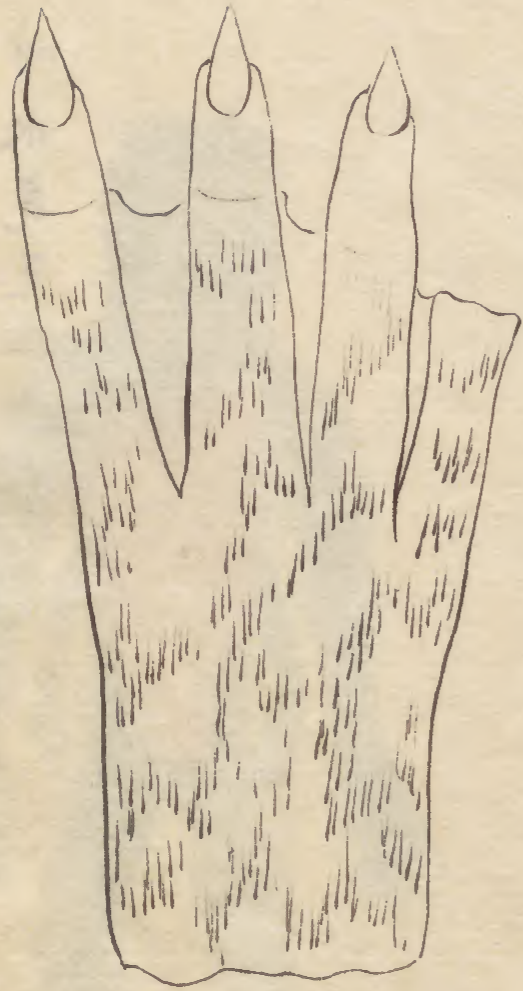


慄然聲、追呼求角能默而不應請益堅知了此物  
水之怪鐵心好漢豈遷延岸上確鬪迭相博飽喫毒  
手與尊奉公膺安敢抗猛士膝下壓伏力如綿拔白  
凜然冰三尺截取左腕血涌泉水唐負痛一再叫捧  
頭鬼腕沒深淵爾木閱歷二十禩傳家作寶貽孫子  
宛然葛燈麻蠅拂所期長不流柔靡杲見佳兒承乃  
考志氣英發克濟美予聞此話袖飛騰遺烈之鼓文  
弱七欲賦強搦筆如椽模寫難盡深自恥不聞羅  
城門外邊奇冑鬼腕斷得播美談又不聞唐代豪雄  
郭充振斬斫妖手威遐覃嗚乎千餘年間英名蒸灼

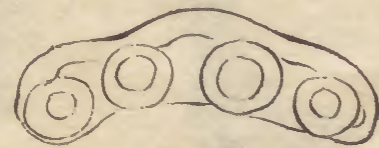
垂宇宙今也得斯人始並立為三

未段所引典故頗  
不雅馴以其事相

類故結  
用之



水虎腕圖二  
此一本折



右水虎断腕一麾下士宮崎山所傳示便寫以藏于  
家但與上所圖筑前步卒斬得者絕異可疑或曰此  
必水虎足也

水虎圖一



寛永年中一尾屋園肥田と取川養字  
 一頭のみ同のうゝの蛤のふゝゝ 其れハ二  
 一つは石のふゝゝのれ  
 一葉の葉のふゝゝ 其れハ四  
 一葉の甲のふゝゝのれ 其れハ五  
 片のふゝゝのれ 其れハ六  
 其れハ七  
 一尾のふゝゝのれ 其れハ八  
 一尾のふゝゝのれ 其れハ九  
 一尾のふゝゝのれ 其れハ十

水虎圖二

川太郎 此圖熊本 榮川典信地取 長七寸 并足ノ長五ツ  
サレノ如惣身赤キモアリ  
 カツバ 江戸 カハタロウ 山城 カワロ 但馬方言



按ニ本網溪鬼異ノ附録ニ出ス處ノ水虎俗云河太郎  
江戸ニテカツパト云者ナリ此物虫類ニハ載レ氏虫屬ニ非ス電  
及鼈ノ屬也九州地方水中ニ産ス豊ノ前後最多トス共大サ  
五六歳ノ小兒ノ如シ背ト腹ニ甲アリ鼈ノ如シ首ヲ打ハ甲中へ  
縮入ス手足モ亦然リ両手ヲ甲中へ縮入スハ両脚伸出ストモ  
亦亀鼈ト異ナルトナシ遍体粘滑ニ<sup>捕<sub>ハ</sub>難</sup>捕<sup>ハ</sup>觸ル時ハ青氣アリテ  
洗淨<sup>ス</sup>共其臭氣脱去スル<sup>ト</sup>ナレト云性素ヨリ相撲ヲ好ム夏  
夕納涼ナカラ水邊ニ出テ壯觀ナリト云人肝ヲ好食フ故ニ土人  
大ニ懼シ胡瓜ニ一家ノ人名ヲ書テ水中ニ抛入テ其害ヲ免  
ル<sup>ト</sup>云胡瓜ノ味人肝ニ似タリ因テ此モノ亦嗜食<sup>フ</sup>ヲ以テ如此

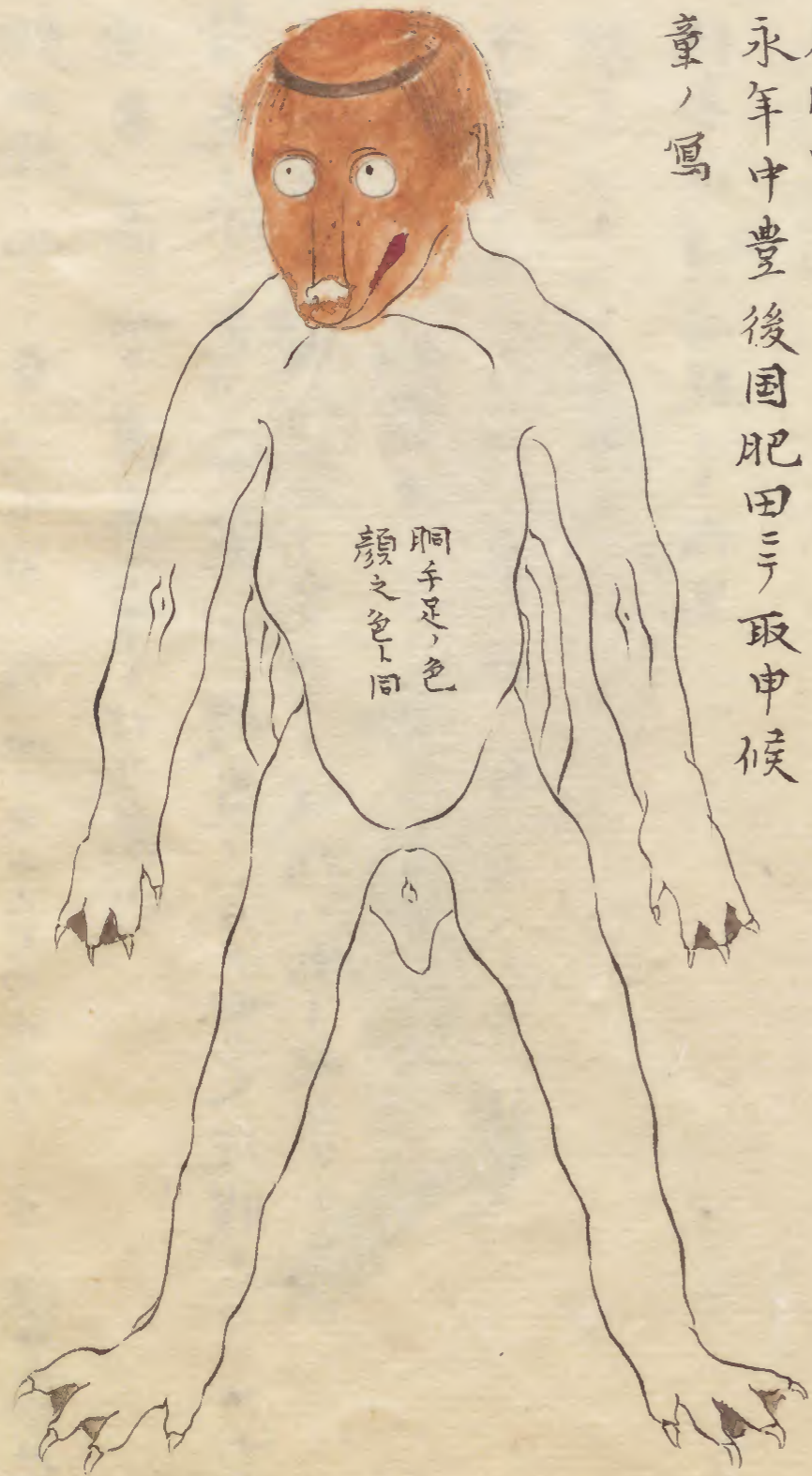
年、胡瓜ヲ流ス<sup>ト</sup>トメ此物関東ニ稀ナリ偶アリト虽<sup>ハ</sup>殊ニ  
人害ヲナサズ豊後ノモハ人ノ為ニ害ヲナス<sup>ト</sup>少ナカラス夜陰深  
窓ヲ窺テ處女ト私ニ共通ス婦人此物ノ為ニ魅惑セラレ<sup>ト</sup>  
ヲ察セス冥ニ美少年ト思ヘリ月ヲ経テヤマサレハ自然ニ精  
液ヲ吸盡メ顔色晴慘形容憔悴メ終勞瘵ハナル<sup>ト</sup>輒スレハ孕ル  
<sup>ト</sup>アリ満月ニ至テ蟬<sup>ノ</sup>蟬<sup>ノ</sup>狀ノモノヲ産下スコレヲ厨<sup>ノ</sup>邊ノセ、ナギニ  
本ノ竹ヲ挿ミ此異狀ノモノヲ倒懸メ釣<sup>ノ</sup>磔ニカケレハ水妖ハナレテ再未  
ラス凡處女速ニ他へ縁組ヲスレハ此患ナレト云倘縁組モセサル孤独ノ  
室女ハ此患ニ罹リテ生涯他へ嫁スル<sup>ト</sup>ナリ難キモノマ、アル<sup>ト</sup>トソ  
可懼ノ甚キモノナリ婦ノ目ニミエシ共他人ノ目ニハ見ヘスモノナリ

婦人此物ニ見ユマルト云フアリ其婦人恍惚トメ精神ナク夢  
 幻ノ如ク譚語ス人ニシテ知テ連歸ントスルニ重クメ少シモ拳動ス  
 難シ衆人ヤウニニメニナイ歸トスルニ跡ヘ牽モトサルヤウニ覺ユ  
 衆人耶許ノ声ヲ出メ此所ノウア神肥後ノ地方何某ノ神  
社其名ヲ志知ヤウ略之董表ヲ  
 越ルト忽ニ身体輕ク精神清爽ニメ復天ス始テ人事ヲ解ス  
 語云フ彩敷水虎ノ手トリ是トリ取ツキテ不放ヨシコレノ  
 九州辺ニハマアルニテ珍シカラストナリ是別ニ一種ノ水虎ニ  
 水虎中ニテモ人ニ害アルモノナリ幸ニ關東ニナキヲ以テ  
 悅トス此他種ノ奇譚アリ枚舉スヘカラス粟本瑞見隨聞  
 向謾記焉



水虎圖之  
 河童寫真  
 所捕于隈川木場  
 本草所謂水虎即是

水虎圖四  
宝永年中豊後國肥田三ノ取申候  
河童ノ寫

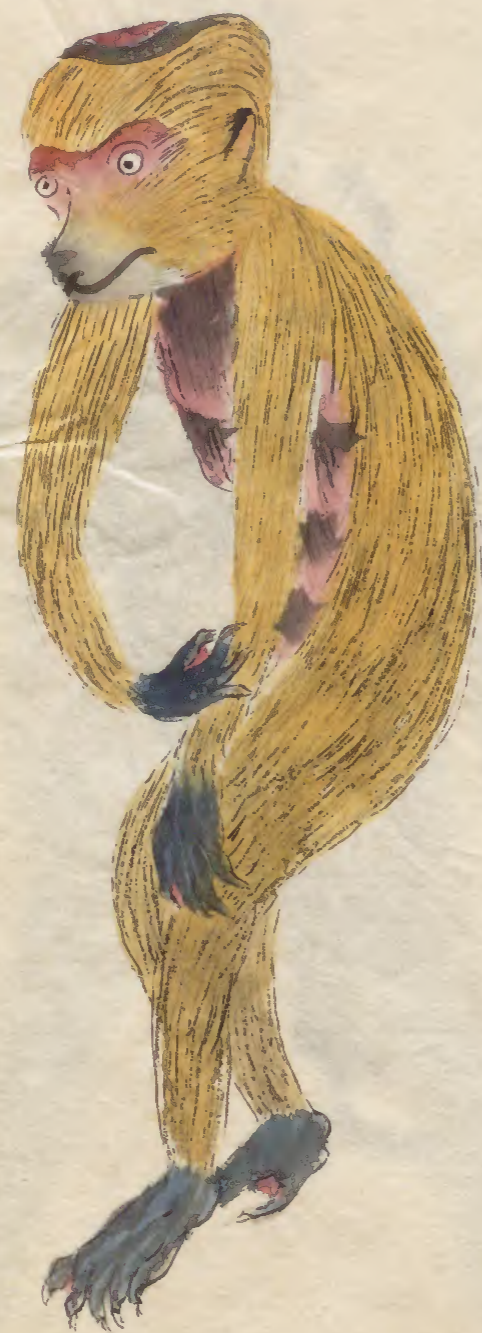


胴手足、色  
顔之色、同

- 一頭四繪ノ如クニ有ハマグリ貝ノ様ニ異ノロムスヒウチカフリソコノ深サ一寸也
- 一齒亀ノ齒ノ如ク奥齒上下トガリ齒也
- 一背亀ノ甲ノ色カクサ亀ニ同シ腹亀ノハラノ如クハ尻腹ニワラカナル立筋有亀ノ取所ニクリ爰ヲトリ候得ハ働テ成ガタク候
- 一手足ノ節人ニカワリカヘシモモ又前ニモマガルナリ
- 一手足共ニクニ候得ハ亀ノ如ク身ノ内ヘ入申候也
- 一腥トタトヘシ者毎之

鍋島模津守殿ヨリ備寫

カワツル  
水虎圖五  
タケ一尺程



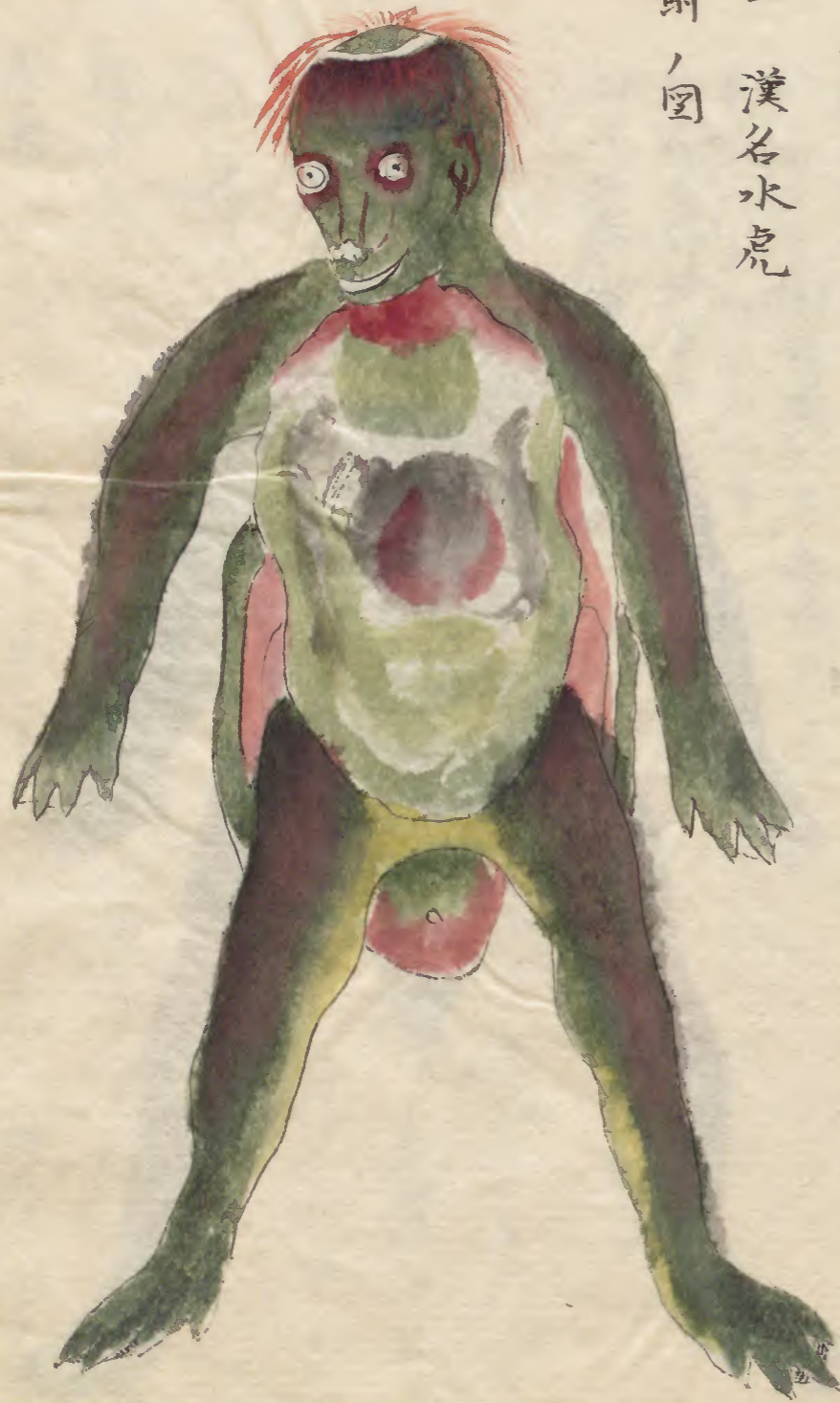


水虎圖六  
川太郎



大略共茅二圖曰

水虎圖七  
河童 漢名水虎  
前ノ圖



河童 水虎 圖八  
後、圖



以上四圖皆  
疏前老候所寄示  
者命門生模寫以入卷  
惜未及質其所遇之人共所  
得之地也

山海名物圖會 手瀨微齋著

卷之三

星塔河童

星塔河童

星塔河童

形方之威、山、海、河、川、

猿、眼、出、水、中、見、

人、也、其、身、如、水、中、見、

入、時、其、身、如、水、中、見、

形、如、水、中、見、

其、身、如、水、中、見、

其、身、如、水、中、見、



此即水引の中  
 中布子水引  
 集集子水引  
 之

虛實雜談集 魁翁權





石見外記 渡田中川顯允著

水虎

石見ニテソノ形ヲ見ル人ナシトイヘル農氏ノ語ニ田  
間ノ徑ヲ修メテ泥ヲソノ上ニアゲ置クニ時トシテ二三歳  
許ナル小兒ノ足跡アリ然ルニソノ足跡ヤ、常ニ變リテ  
踵ノ方尖リテ鳶背根ナト押し付タルカ如シマタ水  
際ノ沙ノ上ニモソノ如クアユミタル足跡ノ有ルヲアリ是レ  
ソノ外ニ類ナケレハ必ス水虎ノ足跡ナルヘキヲ知ルト云  
サテ三隅郷岡崎ノ地ニテムカシ水虎ト角カセシ人ノ事ヲ  
聞クニ此物満身スラトシテスヘリキニテツカミ難ク其爪

水席天蓋蓋圖



縮寫



水カキアリ

剛利ナラヒナクソノ胸サキニ打コマシタル處小ナルニ又鋏ノ跡ノ如シトゾ此ニ事ニテ手足ノ大抵ハ測リ知ルヘシサテ水虎モニ性善ナルモノアリ性不善ナルモノアリ石見ニテ近來ハ絶テ水虎ノ災事ヲ聞カスヨハニ伊藤祐香カ圖ヲ寫シ出セリクハシクハ余カ野中松ニイヘハ斯ニハ畧セリ

推古天皇二十七年己卯夏四月四日壬寅近江言  
蒲生河有物形如人秋七月攝津言漁父下罟堀江  
獲物形如小兒日本史  
燿葉此雖無水虎之名而其為水虎也草、每疑



下學集

獺ノ老而成

異本云滯壯沙門虎闕師錄撰

河童者

倭漢三才圖會

山猿

神異經云西方深山有人長丈餘袒身捕蝦蟹就人  
火灸食之名曰山猿其名自呼人犯之則發寒熱蓋  
鬼魅耳惟畏爆竹煖燔聲

按九州深山中有山童者貌如十歲許童子遍身  
細毛粉褐色長髮蔽面肚短脚長立行為人言而  
誤也和人互不怖 飯雜物喜食助斫木之用力  
甚強若敵之則大為灾所謂山猿之類小者手  
太

即曰川童是曰山童  
山川異同類別物也

肥前

菅原大明神 在兵揃村

自諫早  
十里南

祭神 菅丞相

元也丁巳川童也 志事 司 我 卷 示

此邊多有水獸而捕人涉河人書件歌於竹葉投  
川則水虎不為害云

又長崎之辺有称淡江文大夫者能治水虎而嘗出  
符涉河人携其符則不害矣 或時有壯士等戲  
飛礫於海中若干也於是水虎来于淡江家告曰

從長崎官令黑田家西泊營而我栖投礫若累日  
不止則為對彼家灾害也因澁江訴上件趣人咸  
以為奇

豐後

豐後回土產

川太郎 河歌如小兒

今更の書は少しもいふべし  
此の世は世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に  
世に世に世に世に世に世に

長閑集

本朝食鑑 野心大

近時水邊有河童者能惑人或謂大鼈之所化也故  
面醜形如童肌膚多腥腥而青黃色頭上有凹處常  
貯水有水則多力難制無水則可捕之於是若人遇  
之必先拳腕掉拳急拊彼頭則斃傳聞海西諸國此  
物多為魅而邪魔害人土人所謂非大鼈而老獺之  
所化也其物類之變化難測海國尤多此族矣

本草啟蒙 小野蘭山

水虎

カワバ

古歌江  
戸奥川

カハタラウ

畿内  
九州

カハトノ  
カハツバ

共同上  
越後佐渡  
カハ

カハラ

越前播  
州護州

カハコ雲州

カハコホシ

勢州  
山田

カハラユソウ

白子  
カハロ

桑名

カハタ

共同上  
桑名

カダラウ

上州

グ、タラウ」  
エンコウ

共同上  
防州石川  
後

コ

松山  
メドチ

南部  
カウゴ

備前

カウラワラウ

筑州

テガワラ  
起キニツシ

加州

諸州皆アリ濃州及筑前柳川辺尤多シト云凡ソ舊流大江

迎時ニ出テ児童ヲ魅メ水ニ沈メシメ或ハ人ヲ誘ヒ角カメ深

淵ニ引入ルソノ體甚粘滑ニメ捕ヘカクシ

経ハ八角カ勝ヤスク捕ヘ易シト云フ角カイ昭サル、モノハ尖

州ヲ用テ治スルヲ大和本草ニ見タリ性好テ胡瓜及白粉ヲ

食フ白糖三筒許ヲ食フ寸ハ能酔フ麻指及其炭ヲ忌ミ  
蜀黍糕ヲ惡ム若人ロニ鐵物ヲクワヘ居レハ水ニ引入ル、一能  
ハスト云フ其形状ハ人ノ如ク兩目圓黃鼻ハ尖出シ猴ノ如シ  
只大ニメ狗ノ如ク齒ハ龜齒ノ如ク上下四牙尖レリ頭ニ短髮  
アリ色赤シ額上一孔アリ深サ一寸上ニ蓋アリテ蛤ノ如シ  
面ハ青黑色背色ハ龜甲ノ如クソノ堅キヲモ同ジ腹モ龜版ノ如  
ニメ黄色ナリ左右腋下ニ一道ノ豎條ナリ柔狀ニメ白色ナリ  
コノ處ヲ執ル寸ハ動ク一能ハスト云フ手足ノ形ハ人ノ如ク  
青黑色ニメ微黄ノ帶ブ四指短クメ爪長ク指間ニ蹠アリ  
手足ヲ縮ルトキハ皆甲板ノ向ニ藏ル、一龜ニ異ナラス

手足ノ節前後ニ屈スル、一人ニ異ナリ

有斐齋割記 蘆屋高祖

美濃國ハ川多クテ土人畏ル、モノハ泥亀ト河太郎ナリ河太郎  
ハ川獺ノ老タルモノナリ此國須賀村ト云処ニ九郎右エ門ト云百姓  
川辺ニ出ケルカ暮マテモ不飯其子九郎助恠シク求ルニ父カ負行  
タル砂呑川辺ノ砂上ニアリテ持タル鋤ニ水際ニアリ大ニ驚テ水鎌ヲ  
賃テ水底ヲ見セシムルニ淵底ニ體アノト云然ニハ上ヨト云ハ死骸ハ  
搗臼ホトノ黒キ怪物カ押入居テ放サスト云人不信サラハ証據ヲ見  
スヘシトテ死骸ノ縊半ヲスカシテ少シ切テ見ステ九郎助ハ人ノ縊半  
ニマカヒナシト云此怪カニ及ハストテ虚葬シテ止ケル三十日アリテ二里  
斗服ニ大藪ノ渡シト言処ニ浮出タルカ水腫四支モ損シテ只額ニ痣



アルヲ以テ九郎左エ門ナルヲ知リ此河太郎ハ其淵ノ至ナリト云来  
レリ寛永中ノナリスヘテ此淵ニ水出レハ河瀬化シテ器物材木ナト  
ニ成テ流レ来ル人ナレヲ取ントスレハ水中ニ引入ルトナリ同國ノ  
カ士小柳モコレカ為ニ没セリ

同國津島ノ神祭ハ六月十五日ナリ祭前三日國中ノスツ  
ポン人ヲ傷テ常ニ異ナリ人ノ後門ヲ深ク吸取リ俗ニ津島神ニ  
土産トシテ奉ルトフ國中ノ小兒三日ケ間河邊ニ出サストカヤ

九州地方多河太郎之患人或投小石於水適中之  
則必為害又婦女為之所魅則為病百計不去必至  
死薩摩州有一痴女數與河太郎交接有身產一男  
子生無髮長不生齒乃為僧名祖音持安國寺大隅知羅  
郡加治木村一日與其徒浴水忽沒深淵不出者良  
有安國寺人皆以為溺死頃之出其行水如平地後效為常人  
聞之薩摩州人薩山有物形骸皆人也呼為山郎極  
有力伐木者予以甘蔗役使之喜在人之後不敢前  
行到平易之地則投木走世福山爺山嬢者謂其化



河原のふくさのきりぎりす  
さびしきうらみのつらさ  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる

肥前守のきりぎりす  
さびしきうらみのつらさ  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる  
あはれいふはしのさか  
きこえぬもよほさるる

けいせいのねんじつに  
あつたまはつたに  
目くろくくつに  
致し得るに  
いふに  
のめりまうとちよ  
おのまに  
何事か  
のまに  
あつたまはつたに  
目くろくくつに  
致し得るに  
いふに  
のめりまうとちよ  
おのまに  
何事か

あつたまはつたに  
目くろくくつに  
致し得るに  
いふに  
のめりまうとちよ  
おのまに  
何事か  
あつたまはつたに  
目くろくくつに  
致し得るに  
いふに  
のめりまうとちよ  
おのまに  
何事か

此類是也... 凡人... 河童... 玉瀉流臭

河童 處々大河ニアリ又池中ニアリ五六歳ノ小兒ノ  
如ク村民奴僕ノ獨行スル者往々於河邊逢之則精  
神昏冒スト云此物好ニテ人ト相抱キテ角カ其身  
涎滑ニシテ捕定カクシ腥臭滿鼻短刀ニテ欲刺  
不中角カ人ヲ水中ニ引入レテ殺スナリ人ニ  
勝ナクアタハサレハ没水而見エス其人忽恍惚ト  
シテ如夢而歸家病ニト一月許其症寒熱頭痛遍  
身疼痛爪ニテ抓タルアリ有之此物人家ニ往々  
為妖種々怪異ヲナシテ人ヲ惱スナリ狐妖ニ  
似テ其妖災猶甚ニ本草綱目其部濕生類溪鬼也

ノ附録ニ水虎アリ與此相似テ不同但同類別種  
ナルヘシ於中夏之書予未見有此物 和本草

縣無注を叩きぬるその説を拓きては信ずる可き事  
也此の三交の湯則に載り彼里の懐中より採りて  
是れを以て此の書に人の信存せしむる可し  
ゆへにふしむる可し水虎の書に人の信存せし  
むる可しや此の書に水虎の書に人の信存せし  
むる可し書に人の信存せしむる可し書に人の  
信存せしむる可し 市井新編 林自史 正志輯

痔瘻の事

寛政八年予の痔瘻の患は甚しき者なり  
 廣河等より山等の處に遊遊し胡麻の油の妙あり  
 之を以て痔瘻の患を治すに能く其の功甚大なり  
 此の油は麻の葉を以て造るに能く其の法は  
 人の手で作るに能く其の法は人の手で作るに能く  
 我々の痔瘻の患は甚しき者なり胡麻の油を以て  
 其の功甚大なり其の法は人の手で作るに能く  
 名に記すに能く其の功甚大なり

西書表

荒源三郎本名ハ井上ニテ姓ハ信濃源氏之末裔  
ナリ毛利大江元就ニ仕ヘテ藝州高田郡吉田ニ  
住ス天文三年八月吉田ノ釜カ淵ヨリ化生ノ者  
出テ近辺ノ男女童ヲ擲テ淵ニ菟入是奇恠ノ事  
ナリト民屋商家門ヲ鎖シ扉ヲ閉テ吉田郡山ノ  
城下往来絶タリ大江元就聞玉ヒテ斯ル奇恠ハ  
古ヘニハ有トハ聞ヒ實否ヲ不知然ルニ今世不  
思議ノ災ナリ定テ故アラシ誰カ早ク退治シ正  
體ヲ顯スヘシト嚴重ニ下知アリシカヒ如何様



是ハ大蛇カ鬼カ直者ニハ非シト衆議區ニテ敢  
テ進ム者モナカリシ處ニ荒源三郎元重進出テ  
曰假令大蛇鬼神タリト云レ武ノ大勇ヲ出シ以  
テ退治センハ安キ程ノ下也某シ先淵底ニ入テ  
鬼カ蛇カ其全體ヲ見届申サント時ヲイカウカ  
シ太刀取テ走り出釜カ淵へ行向ヒケリ何様勇  
ヲ以テ挫カハ元重ヨリ外更ニ有マシ其形容七  
尺ニ餘リ力量ハ七十人がカニテ神道魔法ヲ行  
ヘハ一定大蛇カ鬼カヲ取ヘキ勇者十リト萬民  
雲霞ノ如ク聚リ見物ノ貴賤市ヲナス時ニ荒源

三郎鯨ニ成リ下帯ニ太刀カヲ十文字ニ差テ  
淵ノ浅ミニ立大音ニテ訶リケルハ如何ニ此  
淵ノ化生體ニ聞ケ汝人民ヲ取シ其科ニ依テ唯  
今殺害ノ為ニ荒源三郎来リタリ出テ勝負ヲセ  
ヨト叫リケレハ淵ノ底裏ニ波浪立テ水岸ニ溢  
レテ流出シカ元重カ兩足ヲ水ノ中ヨリモシト  
相テ引込ントス源三郎吃ト見テヤサシヤト足  
ヲトリタル兩手ヲ握テ曳ト引ク化生モ下へ引  
互ニ引合躍出シカ曲者ハ百人カモ有ト覺ヘテ  
山ノ如ニシテ動セス面ヲ出シタルヲミレハ鬼

ニハ非ズ 淵候ナリ 俗ニ河太郎ト云者アリ 空ハコリ 頭ニ窪キ  
所有テ水アレハカアリ 水ナキ時ハ勢力ナシト  
兼テ聞ヌレハ頭ヲ取ントスルニ忽滑テ取レス  
相合シカ終ニ頭ヲ相シテ逆シマニナシ振廻シ  
ケレハ頭ノ水覆テ淵候忽力衰ヘケレハ提テ岸  
ニ揚リ化物取タリト呼リケレハ見物ノ貴賤取  
タリヤ取タリト一同ニ喚ケレハ暫鳴モ静マラ  
ス斯テ元重件ノ者ヲ繩ニテ縛リ提テ城中ニ帰  
リ釜ケ淵ノ化物生捕候ト訴シカハ元就感悦不  
斜誠ニ勇アリ智アリ源三郎カ血氣吾亦兼テ大

蛇鬼神トハ思ハサリキ汝智勇ノ武士ナリトテ  
加恩五十貫ニ来國行ノ太刀ヲ賜リケレハ源三  
郎不受シテ曰吾數度ノ軍ニ能敵ヲ討取タニニ  
賞祿少シ雖然不足ト更ニ思ハサリシニ今此畜  
類ヲ取タリトテ斯ル恩賞ハ却テ耻辱也且ハ懐  
ヲ生スト笑テ賜リタル太刀指置吾家ニ歸リケ  
ルトカヤ 武家高名記





肥後川童

肥後國隈本川童  
人々其を以て其の常國の川童  
時川狩りしに其の好む人川童  
中より清く其の如く其の地  
家の人命を絶たす其の川童  
川童を狩りしに其の好む人川童  
地を以て其の好む人川童  
川童を狩りしに其の好む人川童  
川童を狩りしに其の好む人川童

剛投入をくし 子孫をきく けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも

あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも  
あまの川をきく 湯を けりも けりも けりも

諸國便覽

淀川の河童

城別所之河童の事  
城に推して河童の事  
淀川に河童の事  
河童の事  
河童の事  
河童の事  
河童の事  
河童の事  
河童の事  
河童の事

うきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし

おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし

おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし  
おはらねのうきうきとあそぶべし



中津の風景

附 河津橋より見たる

一馬車に乗る程は、其の谷間に下りて見ると  
のどろりとした水が流れて、その音が、  
心へに響く。橋の下の石は、苔むして、  
光澤が、さびしく、河の流れは、  
そよそよと、流れて、水たまりが、  
静かに、光を、反射して、  
さながら、鏡の如き、  
川面が、見えて、  
心へに、安んずる、  
感じが、する。物づく

様々なる事々あり申付候事存付りし事々  
多々様々ありし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々

何事も申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々  
申付候事存付りし事々申付候事存付りし事々

此の味をいふは、  
中つちの味、  
名も、  
あつち、  
多分、  
幸の、  
海、  
世、  
な、

此の味をいふは、  
中つちの味、  
名も、  
あつち、  
多分、  
幸の、  
海、  
世、  
な、

あまはしきかゝるる縁にたれにさし  
けりてはなほさるる其婦をさし  
標流世にたれにさるる縁にたれに  
はるるまのたれにさるる縁にたれに  
せりてはなほさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに

たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに  
たれにさるる縁にたれに



うらむももは此處のいへるに付てて大なる  
と云ふに部の所表よりても何れか  
と違申 稀病に云々人の中より  
と云ふ人等しては云々云々  
此の云々の邊りに云々云々  
子云々の邊りに云々云々  
云々云々の邊りに云々云々  
此の云々の邊りに云々云々  
は云々云々の邊りに云々云々  
た、向方から我の書に云々云々

原六は、  
い、ん、れ、カ、キ、ン、ニ、ン、ン、ン、  
今、日、は、キ、ン、ニ、ン、ニ、ン、ニ、  
云々云々云々云々云々云々  
後、云々云々云々云々云々  
一、書、は、云々云々云々云々  
の、云々云々云々云々云々  
此、の、云々云々云々云々  
は、云々云々云々云々云々  
の、云々云々云々云々云々



尚月庵漫錄 世不書矣

一 河野大別子多子 猿猴心 角力と好乙婦  
女と相以

一 治和園津年一 鳥の心多し 以て人々を  
欲し書き 海に流る言を ありし 人 治和園

之 女 治和園 津年 鳥の心 多し 以て 人々を  
欲し 書き 海に 流る言を ありし 人 治和園

治和園 津年 鳥の心 多し 以て 人々を 欲し 書き 海に 流る言を ありし 人 治和園



中陵澤録

中陵澤録

中陵澤録  
一、中陵澤の源流  
二、中陵澤の流域  
三、中陵澤の地質  
四、中陵澤の生物  
五、中陵澤の産業  
六、中陵澤の文化  
七、中陵澤の歴史  
八、中陵澤の将来



何れも人の歌

何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌  
何れも人の歌

藤成治中後漫保

溺人必嘆

水に溺るは戯けの思惟に陥るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり  
 夫れは沈むるに似て一息の間に溺るる事なり

中陰律





